

日本語教材としての アーネスト・サトウ『会話篇』

— 国内外の日本語会話書との対照から —

兪 三 善

1. はじめに

本稿は、明治初期までの国内外の日本語会話書との対照から日本語教材としてのアーネスト・サトウ『会話篇』（1873）を評価するものである。

『会話篇』はイギリスの外交官・日本学者であるサトウによって刊行された日本語学習書である。だが、なぜか同書に対する評価は一律ではない。日本語学の立場から考察した研究や『会話篇』の解説や書評などにみられる評価としては、①日本語学習の資料（吉田 1952：337）、②語学書（石井 1957：84）、③江戸ことばの手引書（小島 1972：52）、④江戸語（東京方言）の手引書（金田・宮腰 1994：178、飯田 2002：177）、⑤英語を母語にする人のための日本語学習書（常盤 2003:50）、⑥教科書というよりも江戸口語の表現集（金沢 2008:175）、⑦日本語学習書（黒崎 2011:11）がある。

そこで本稿では、『会話篇』の教材としての側面を明治初期までに国内外で刊行された日本語会話書をとおして検証することにした。

筆者のサトウ『会話篇』に関する研究は兪（2015、2017、2019）がある。兪（2015）では言いさし表現を考察し、兪（2017）では感動詞の諸相について論じた。両者は『会話篇』の口語的側面を検討したものである。兪（2019）ではサトウ自身の回想録¹⁾ および日記、またサトウ関連の著作や同時期に日本で活躍していたオールコック、ブラウン、アストン、チェンバレンなどの日本および日本語に関する記録も踏まえながら日本語教育の教材としての側面と価値を検証した。本稿は、いわば兪（2019）の続編というべきものである。視点を

明治初期までの朝鮮、ロシア、英国、日本で出版された日本語会話書において、対照という方法で、そこから映し出される同書のディテールを評価の対象に加えるものである。研究の出発点として、調査対象の概観と検討、会話文例の実態について述べることにする。

以下、2節では調査対象の明示、編纂の背景、著者、構成について述べ、3節で会話文例の実態を検証する。その分析は3-1. 内容、3-2. 表記、3-3. 対訳、3-4. 注解において行う。最後の4節は総括とする。

2. 調査対象の概観と検討

『会話篇』の対照資料として下記の8点を用いる。これらの選定は外国人の日本語学習を支援する教材であること、また本文が会話であることの2点に基づく。後者が『会話篇』との対照においてもっとも重要と考えた。資料を扱う際には国別にするのではなく、通時的にみていく。

では、本論の第一歩として調査対象の明示、編纂の背景、著者、構成について考えてみよう。

2-1. 調査対象の明示

- (1) 『弘治五年朝鮮板伊路波』1492年刊²⁾。以下、引用に当たり『朝鮮板伊路波』と記す。
- (2) 康 遇聖
『捷解新語』1676年刊³⁾。
- (3) ゴンザ (権左)
『日本語会話入門』1736年刊⁴⁾。以下、ゴンザ『日本語会話入門』と記す。
- (4) リギンズ (John Liggins)
『英和対訳会話書』1860年刊⁵⁾。以下、リギンズ『英和対訳会話書』と記す。
- (5) ブラウン (Samuel Robbins Brown)
『会話日本語』1863年刊⁶⁾。以下、ブラウン『会話日本語』と記す。
- (6) オールコック (Sir Rutherford Alcock)
『仏・英両語対訳、片仮名字・ローマ字による日常日本語対話集』1863年刊⁷⁾。以下、オールコック『日常日本語対話集』と記す。
- (7) サトウ (Sir Ernest Mason Satow)
『会話篇』1873年刊⁸⁾。以下、サトウ『会話篇』と記す。

(8) チェンバレン (Basil Holl Chamberlain)

『日本語口語入門』1888年刊⁹⁾。以下、チェンバレン『日本語口語入門』と記す。

(9) 黒野義文

『露和通俗会話篇』1894年刊¹⁰⁾。以下、黒野『露和通俗会話篇』と記す。

2-2. 編纂の背景

本項では、上記の調査対象を誕生させた朝鮮とロシアとヨーロッパ（オランダ・フランス）における日本語教育の実施状況について述べる¹¹⁾。朝鮮からみてみよう。

日本と朝鮮の間には室町時代の3代将軍足利義満の時に国交が開かれ、人的交流や貿易が活発になる。とくに日朝貿易は幕府をはじめ、守護大名や豪族、商人なども参加し活況を呈する。この流れに呼応すべく、朝鮮では国策として1414年から司訳院で日本語教育が実施される¹²⁾。

ロシアでは1701年頃に日本人漂流民の伝兵衛らをとおして日本と具体的に関わるようになる。ロシアをヨーロッパ化したピョートル1世は情報収集や貿易のため、1705年サンクトペテルブルクに日本語学習所を設置し、そこで伝兵衛が日本語を教える。ロシアは1706年にカムチャツカ半島を占領し、ラッコやアザラシの毛皮などを獲るために千島列島でも活動する一方、日本と民間交易を行うなどの接触をもった。さらにシベリア開発も加わり、そこから得られる黒貂をはじめとする高価な毛皮を輸出するため、極東航路への比重が高まっていった。この時流に沿うように、ゴンザが1736年からペテルブルクの日本語学校で日本語を教え、1870年にはペテルブルク大学東洋学部に正規の日本語講座が開設される。また1888年には黒野義文がペテルブルク帝室大学東洋語学部の日本語担当の教員となる¹³⁾。

ヨーロッパは、19世紀に入ると、アジアへの進出が盛んになり、それに伴うアジア研究も活発になった。オランダやフランスの大学では日本語教育が行われる。オランダでは1851年にライデン大学に日本語教授職が設けられて、ホフマンが就任する。フランスでは1863年にフランス国立東洋語学校に日本語講座が開設されて、ロニーが教授に就任する。

日本国内では、1858年に幕府がアメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスの5カ国それぞれと結んだ安政五カ国条約により、翌1859年7月1日をもって長崎、神奈川、箱館の3港が開港する。これに伴って、英米や欧州の外交官・宣教師・商人たちが国交・宣教・貿易を進めるために日本に押し寄

せてきた¹⁴⁾。

こうした状況から国内外に日本語教育の必要性和それを支える教材への需要が高まった。ところが、現実はどうであろう。当時の国内外の日本語学習の環境は、サトウの『回想録〔上〕』(p.65)の記事から知ることができる。

当時は、日本語を学習する手引きがほとんどなかった。J. リッグス師の書いた、長崎の方言のわずかな語句しかない薄いパンフレットや、ウィリアム・メダースト(兄の方)の編纂で何年も前にバタヴィアで刊行された単語集、ランドレス編のロドリゲス日本文典、オランダ語で書かれたドンケル・クルチウスとホフマン共著の文法、レオン・パジェスによる同著のフランス語訳、同氏による一六〇三年の日葡辞典の一部訳、ホフマンの日蘭英会話書、ロニイの日本語入門など、そんなものがあるに過ぎなかった。しかも、これらの書物はほとんど日本では手に入らなかった。私はロンドンを立つとき、日本語に関する書物は何も持って来なかった。

上記のサトウの証言から、幕末のころは日本語の学習に関するかぎり、何事も独力と手さぐりで進んでいくしかなかったことが察せられる。こうしたゼロからの出発であったため、外交や宣教や教育に携わる人々が日本語についての著作を世に出すにいたる。その一部が本稿の調査対象となっている。

とすると、この外交や宣教や教育に携わる人々がどのような人たちであったのかを知る必要がある。

2-3. 著者

まずは『朝鮮板伊路波』の著者を紹介したいのだが、残念なことに、未詳である。

『捷解新語』の著者の康遇聖は、秀吉の朝鮮侵略の時に捕虜として日本へ連れてこられて10数年住み、のちに朝鮮へ捕虜送還される。その後、科挙(倭学)に合格して、釜山の司訳院で倭学訓導および日本語通訳を務めるかたわら、日本語学習書として同書を編纂した¹⁵⁾。

ゴンザは1728年に薩摩を出帆した漂流民の一人である。1736年からロシアの日本語学校で日本語を教えていたが、この学校の監督であったロシア帝室科学アカデミーの司書補アンドレイ・ボグダーノフの指導と協力のもとに『日本語会話入門』を編纂する¹⁶⁾。同書ほかに『露日語彙集』『簡略日本語文法』『新スラヴ日本語辞典』『友好会話手本集』『Orbis Pictus』も上梓している¹⁷⁾。

リギンズは神学校を卒業後、布教活動をしていた中国で健康を害し、主治医の勧めに従って保養の目的で来日し、長崎に10カ月ほど滞在していた。日本滞在中、日本人通詞に英語を教え、また彼らから日本語を習得した。この英語教授と日本語学習という環境から生まれた資料が1860年に上海で刊行された『英和対訳会話書』の基礎となる¹⁸⁾。

ブラウンは神学校を卒業後、マカオ、香港、中国での宣教活動をへて、1859年に布教のために来日し神奈川に滞在した。当時はキリスト教の布教が禁じられていたため伝道ができず、日本人に英語を教授するかたわら、後進の宣教師のために日本語の文例を採集し、1863年に上海で出版したのが『会話日本語』である¹⁹⁾。

オールコックはイギリスの外交官である。医学生としての知識を得るためにフランスに留学し、その知識とフランス語・イタリア語を身につける。その後、中国の厦門で開業医と同地のイギリス領事館の一等書記官を兼務する。この書記官の経歴により、中国の福州、上海、広東の領事を歴任し、初代総領事として1859年に来日した。その後、『日常日本語対話集』を世に送り出す²⁰⁾。

サトウはロンドン生れのイギリスの外交官である。ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンに在学中に日本在勤の通訳生の募集に応募し、1861年に日本在勤領事館付通訳生の正式の任命を受ける。同年、北京に行って中国語を勉強する。約4カ月の北京滞在をへて1862年横浜に来日する。その後、『会話篇』を上梓する²¹⁾。

チェンバレンは上海を経由し、1873年に来日して日本語と古典の研究に従事した。1886年から1890年まで帝国大学文科大学の教師となり、日本語と言語学を教えた研究者である²²⁾。

黒野義文は東京外国語大学のロシア語教師歴と日本最初の露和辞典『露和字彙』の編纂歴をもつ。1886年ウラジオストクに渡り、1888年からペテルブルク帝室大学東洋語学部の日本語担当の教員となった²³⁾。

以上、8点の著者について検討してみた。著者たちの経歴を振りかえると、彼らには共通点が多いことに気づく。以下で共通点を紹介する。

1点目は、著者8人のうち、ゴンザと黒野は別として、6人は日本語非母語話者であることである。そして日本在住の経験をもつ。康遇聖からチェンバレンまでの著者全員が滞在期間の差はあるものの、日本で生活しながら日本語をマスターした。

2点目は、リギンズからサトウまでの4人が中国から日本へのコースをとっていることである。彼らは中国で日本語学習の基礎となる漢字を習得している。

また日本語学習における漢字の重要性と非漢字圏の人々の日本語学習を妨げる漢字の弊害を体験していて、それをテキストの編纂に反映している。

3 点目は、著者たちが日本語とかかわりの深い仕事に就いていたことである。オールコック、サトウ、康遇聖は外交・交易・通訳の職に、リギンズとブラウンは宣教に、ゴンザとチェンバレンと黒野は教育に従事していた。

したがって、本稿の調査対象の著者 8 人は語学教材の編纂に十分な知識と経験とノウハウを持ち合わせていたといえる。それを念頭において、著者たちの知識と経験とノウハウが調査対象にどのように生かされているかをさぐってみよう。

2-4. 構成

ここでは、各会話書の全体像を示すことにする。『朝鮮板伊路波』の構成からみていこう。同書は 4 往復の書簡を含む小冊子である。1492 年に朝鮮の司訳院で刊行された。同書は大きく「伊路波四體字母各四十七字」と「伊路波合用言語格」とに分けられている。伊路波四體字母各四十七字は基礎編にあたる。伊路波合用言語格は応用編というべきもので、候文体の往信と返信からなる書簡文集である。

『捷解新語』（原刊本）は 10 巻（約 1500 例）²⁴⁾ を収めた中型（200 頁程度）の会話書である。1676 年に康遇聖によって朝鮮の司訳院で刊行された。その後、原刊本の『捷解新語』の不備や日本語の変化に対処するため、1748 年に第一次改修が行われて『改修捷解新語』となり、続いて 1781 年には第二次改修が行われて『重刊改修捷解新語』が刊行された²⁵⁾。構成は巻一から巻九前半までは対話で、巻十は巻九前半までの対話に関連した書簡文集である。

ゴンザ『日本語会話入門』は会話文例の頁数が 47 頁（633 例）の小冊子である。1736 年にロシアで刊行された。村山（1965）によれば、同書はゴンザが自ら文例を採集して編纂したものではなく、チェコの教育学者 J. A. コメニウスが書いた『ラテン語入門』（1633）をボグダーノフがロシア語に直訳したものを、さらにゴンザが薩摩方言に訳して日本語の教材としたものである。現時点で日本人が海外に出て作った日本語会話書の 1 号である。

リギンズ『英和对訳会話書』は 58 頁の小冊子である。1860 年上海で印刷された。サトウが同書を手にしている。

ブラウン『会話日本語』は 1863 年に上海で刊行された。その構成は I 序文、II 日本語の表記表、III 日本語文法序説、IV 英語と日本語の会話文集、V 対話篇、度量衡・貨幣など、英和索引となっている。英和索引を会話書に導入したのは

同書が初めてである。同書の中心をなす会話の部分はIV章とV章である。会話文例の数は3229例(195頁；会話編と対話篇の合計)である。サトウが校正段階にあった同書の一部を手に行っている。

オールコック『日常日本語対話集』は40頁(約320例)の小冊子である。1863年にパリで出版された。同書は第1部と第2部からなる。第1部は7種、第2部は16種の話題が用意されている。

サトウ『会話篇』は153頁(1160例)の中型の会話書である。1873年に横浜で刊行された。同書は第1部(Part I)と第2部(Part II)と第3部(Part III)の3冊からなる。第1部は第1章(Exercise I)から第25章(Exercise XXV)にいたるローマ字表記による日本語文と和英対訳がついた対話文集である。第2部は第1部の対話文の日本語に用いられている語句についての注解を内容とする。第3部は第1部のローマ字表記による対話文の日本語を仮名文および漢字仮名交じり文に直したものである。

チェンバレン『日本語口語入門』は1888年にロンドンで刊行された。同書は理論編と応用編の2部からなる。会話は応用編に掲載されている。巻末には同書に現われる語彙を収録し、これに訳を付けた対訳語彙集と1300余語の有用な英和対訳語彙が付いている。

黒野『露和通俗会話篇』はB4判630頁の大冊である。1894年にロシアで編纂された。同書は3編構成で、第1編と第2編は会話である。3編は日本諺語俚語及文句小集である。

ここまで、9点の会話書の構成について述べてきたが、最後に、これらの調査対象と『会話篇』をめぐって興味深い点があるので、それを記しておきたい。

1点目は、調査対象の刊行地域のことである。すなわち9点の会話書のうち、サトウの『会話篇』のみが日本で出版されている。いわば日本生まれの横浜育ちであるが、ほかの8点は海外で印刷され、発売されている。サトウの『会話篇』は日本語の使用が必要不可欠であった日本国内にいる外国人の日本語学習を支えた教材である。

2点目は、『会話篇』はほどよい学習量をもっていることである。調査対象が小冊子(100頁程度)か大冊(200頁前後)の中、『会話篇』の全25章(153頁)は学習に要する時間や終了の見通しが付きやすく、次の段階に進みやすい内容と学習量である。『朝鮮板伊路波』、ゴンザ『日本語会話入門』、リギンズ『英和対訳会話書』、オールコック『日常日本語対話集』の4点の小冊子は扱う内容が少なく感じ、『捷解新語』、ブラウン『会話日本語』、黒野『露和通俗会話篇』の3点の大冊は終了の見通しが付きにくい面がある。なお、チェンバレンの会

話文例は 59 頁（原本 :294-353）あるが、牡丹灯籠などの長文が入っているためにその分量を量りかねるが、どちらかといえば、ブラウン『会話日本語』のサイズに近いように思われる。

以上をもって調査対象の概観と検討を終え、次節の論点である会話文例の実態の検証に移ろう。

3. 会話文例の実態

本節では、調査対象の会話文例の実態を内容、表記、対訳、注解の 4 項に注目して検証したい。これらの検証にあたって、調査対象の中には一般に馴染みの薄い教材も含まれていること、資料の調査に時間と労力が必要であること、日本語教材の研究において調査対象は無視できない資料であることを勘案し、各資料の目次を提示したいと思う。では、会話文例の内容からみていこう。

3-1. 内容

サトウの『会話篇』には草履の緒が切れてイライラしている場面（EX12-16）や家が古くて雨漏りがする話（EX23-48）²⁶⁾などが設けられていて、そこで使われている日本語には当時の人々の生活臭が漂っている。つまり、生の日本語なのである。そこで、ほかの 8 点にはどのような会話が提出されているかをさぐってみることにした。それでは、『朝鮮板伊路波』からみていこう。

『朝鮮板伊路波』の内容は次に示す目次のとおりである。ただし同書には目次と「巻一」という書簡のナンバリングが付いているわけではない。目次は福島（1974：16）を援用し引用者が付したものである。ナンバリングも解説時の便宜のため筆者が施した。

- 巻一：このほとひさしく（一オ）・・けうけうつしんで申（七オ-七ウ）
- 巻二：おうせのこつく（七ウ）・・御なくさみ候へく候（十ウ）
- 巻三：はるのはしめの御よろこひ（十ウ）・・あなかしく（十三オ）
- 巻四：これより申へく候ところ（十三ウ）・・またまち申へく候（十八オ）

これらに含まれる文の内容は日本からの使者到着のことのほか、巻一と巻二には京都における遊芸などが話題となっている。巻三と巻四には、遊芸・饗応のほか、経済や社会生活についての話題も提出されている。

『捷解新語』の内容は下記の目次のとおり、巻一から巻十下からなる。

- 卷一：与代官初相接 / 送使船問情
 卷二：茶礼講定 / 茶礼問答 / 饌品器皿論難 / 封進物看品
 卷三：下船宴問答 / 始行中盃礼 / 送船催答書
 卷四：銅鐵看品停当 / 銅鐵看品 / 公木入給停当 / 公木入給
 卷五：信使探候船 / 信使到馬
 卷六：信使与島主語 / 離馬島向江戸 / 島主請下陸歇
 卷七：筑前主礼候信使 / 信使接江戸使 / 入江戸見関白
 卷八：信使不受金 / 信使還到大坂城 / 島主請信使饞宴
 卷九：与代官相約振舞 / 和語謙讚 / 日本各道州郡
 卷十上：初相接状 / 入館後先通状 / 講定茶礼状 / 茶礼後賀状 / 茶礼後礼物状
 卷十中：封進宴論定状 / 封進宴停当後通報状 / 宴停日封進物件為先看品事状 / 封進宴後賀状 / 日本船出来案内状 / 着船賀状
 卷十下：銅鐵勿許出給商人事状 / 請公木米入給状 / 請廻次振舞状 / 振舞後賀状 / 伊呂波真字半字竝録 / 伊呂波吐字 / 伊呂波合字 / 伊呂波真字草字竝録 / 簡略語録 / 伊呂波半字堅相通 / 伊呂波半字横相通

上記の卷一から卷四までと卷九の前半に含まれる対話は日本船が釜山に到着した後のやり取りである。日本側から使者が到着し、それを迎えた釜山に駐在する代官が朝鮮側の役人と会合の段取りをし、朝鮮側が使者を接待しながら通商貿易上の折衝をするという内容である。一方、卷五、卷六、卷七、卷八までは釜山から対馬をへて海路大阪へ向かった通信使一行が、大阪から東海道をくだって江戸に至り、將軍に謁見した後、同じ道をとってかえる道中のことをくわしく書いたものである。同書では対話の人物を「主」と「客」に分け、「主」は朝鮮の役人、「客」は日本の役人を表し、小見出しを付してある。このような対話の出し方は同書がもっとも早い。最後の卷九の後半は、日本八道六十六ヶ国の名とその管轄郡数を列挙した国尽くしである。卷十は、卷九前半までの対話に関連した書簡文集である。同書は譯科の譯官を登用する試験用のほか、交易の交渉や接待に関する日本語やそれらに必要な事柄を譯官に教えるための教科書として長く使われた。

ゴンザ『日本語会話入門』の会話は目次のように計 19 章に分類され、19 章は結びとなっている。各章の文例は常体が基調である。会話全体の構成は、ことばを意味で分類して本文を形成している。この構成は同書がもっとも早い。(1) から (19) までの日本語標題は村山の訳である。以下、断りが無い限り、

ゴンザ『日本語会話入門』からの引用文は村山の訳である。

- (1) 物の性質について、(2) 色について、(3) 味、(4) 質について、
- (5) 新芽の成長、(6) 動物について、(7) 四肢について、(8) 思い、
- (9) 病気について、(10) 職業について、(11) 副詞について、
- (12) 前置詞について、(13) 接続詞について、(14) 計算について、
- (15) 学校について、(16) 家の物事について、(17) 町と国について、
- (18) 敬虔、(19) 結び

上記の目次を一見して、話題が日常離れしていることに気づく。事実、江口(2006:66)の指摘のとおり、目次に含まれる文に宗教的・社会的制度などを反映している例文が多い。参考に「神は永遠である」(1章1)、「天使というものは死なないもの」(1章3)、「法が命ずるものをまもれ」(18章521)をあげておく。そのうえ、連続する文例の内容につながりがほとんど見いだせない。

リギンズ『英和対訳会話書』の内容は次の目次のようである。ゴンザと同じく、ことばを意味で分類して会話を構成している。

- (1) Times And Seasons、(2) Numbers And Quantity、(3) Personal And some other Pronouns、(4) On The Wind And Weather、
- (5) Coming And Going、(6) Reading And Writing、(7) Doing And Making、(8) Seeing And Hearing、(9) Commands To Servants、
- (10) Eating And Drinking、(11) Having And Not Having、
- (12) Buying, And Selling、(13) Salutations And Polite Expressions、
- (14) The Language, And Understanding It、(15) Saying And Speaking、(16) Good And Bad、(17) Paying And Receiving Visits、
- (18) Teaching And Learning、(19) Busy And Leisure、
- (20) Sentences on Miscellaneous Subjects

目次から内容が推察されるように、同書から生活感のある会話がはじまる。ただ、このリギンズの『英和対訳会話書』の文例は常盤(2004)によれば、自ら採集したものは少なく、中国語を学ぶための会話書『南山俗語考』の和訳部分から大半を採択しているようである。前述の2-3で述べたように長崎に10カ月ほど滞在している間に生まれた書物であるがゆえにリスクを伴っているようである。

ブラウン『会話日本語』の会話は、IV章の「英語と日本語の会話文集」とV章の対話編に収録されている。IV章の会話集には文の頭の語をアルファベット順に並べた1270例に及ぶ英語文を見出し語としてあげている。参考に「D」で始まる例を少しあげる。

No.92 Do you like Indian corn?

No.93 Do as you please.

No.94 Do it as well as you can.

会話文例は目上・同輩・目下など会話者の相互関係を配慮しての表現を示している。ただ、このIV章の会話集には上記の会話文例にみるように連続した文例の内容につながりのない場合が多い。続く対話編には次の通りの7編の対話を載せている。ここには1959文の対話例が提出されている。

- (1) On Buying Teas、(2) Between a Foreigner and a Japanese Silk-Dealer、(3) On Shipping Goods to Foreign Countries、
- (4) On Buying Silk、(5) Between a Master and Servant、
- (6) On Buying bills of Exchange、(7) On Buying Lackered Ware、

見出しにお茶や絹・生糸や漆器といった具体的な商品をあげ、場面に即した日本語を示したのは同書が初めてである。さらに上記の対話は主人と客とに分けられ、主人には常体を、客には敬体を当てている。

オールコック『日常日本語対話集』は下記のような内容をもつ。目次は英語とフランス語で書かれているが、ここでは英語のみをあげる。

第1部

- (1) Salutation、(2) Affirmation・Negation・Interrogation、
- (3) Going and Coming、(4) The weather、(5) Time、
- (6) Rest and Repast、(7) Travelling

第2部

- (1) Salutation、(2) Of the Weather、(3) Of the Seasons、
- (4) Of Health・Of cold、(5) Of the Health、(6) Meeting、
- (7) Parting、(8) Visit、(9) Breakfast、(10) Dinner、(11) Fish、

- (12) The Watch time、(13) The Morning、(14) Buying and Selling、
(15) Lacquer Ware、(16) China Ware

上記のとおり、第1部はごく基本的な対話文を提示している。第2部ではテーマ別に個々のシーンを設定しての対話例を収めている。この2部の(4)(5)では暑さ・寒さ・健康に関連する類似表現を27語もあげているのが特色である。同書の会話文例は、次に引用する序文の記事から、オールコック自ら採集したものであることがわかる。

私は運よく教養のある知的な日本人の協力を得ることができた。政府高官や上流階級同士の、またそれ以下の人々のやり取りに使用される言語行為とそのフォームに完璧に通じていたため、私はこれを機会にさまざまな項目ごとに一連の口語表現を収集したいと考えた。(引用者訳)

サトウ『会話篇』は次のとおり、テーマごとに分けられた25章から成り立っている。

- (1) Coming and Going、(2) Buying and Selling、
(3) Teacher and Pupil、(4) Orders to a Servant on rising, etc、
(5) Orders to a Servant、(6) To inquire; to ask、(7) To say, to tell, etc、
(8) To say, to tell, etc. (politer forms)、(9) (same subject continued)、
(10) To see, know, understand, etc、(11) On the road、(12) A fire、
(13) Engaging a new servant, etc. Mistake, opinion, etc、
(14) servant asks for leave. Dismissal of servant for various reasons、
(15) The Japanese New Year、
(16) Ehô Mairi、(17) Travelling on duty、(18) Travelling on Private business、
(19) Travelling on Private business (concluded)、
(20) On the study of Chinese Characters、(21) Discussion between a foreign Consul and a Japanese Official on a broken Contract、
(22) The Seasons、(23) The Weather, Wind, Rain、
(24) Showers, Thunder, frost, Ice, snow, Sleet, Hail, Dew、
(25) Introductions, Calls, Presents, etc.

テーマからわかるように、身近な日常が話題となって会話が提出されている。

とくに (12) (21) は当時の時事問題、(4) (5) (13) (14) は使用人をめぐる問題、(11) (15) (16) (25) は日本人の生活習慣、(22) から (24) は日本の気候や旅といった当時の学習者が関心を持ちそうなことが話題となっている。会話文例はサトウが自ら採集したものと考えられる。

チェンバレン『日本語口語入門』の会話は ¶ (パラグラフ) をナンバリングとし、10 項目からなる。

- ¶ 446 Short Phrases in Constant Use.
- ¶ 447 Additional Useful Phrases.
- ¶ 448 Easy Questions And Answers.
- ¶ 449 A Few Proverbs.
- ¶ 450 Fragments Of Conversation
- ¶ 451 Anecdotes I. “True Economy.”
- ¶ 452 II. “Thankful Kichibei.”
- ¶ 453 III. “If They Wait, Their Ages Will Come Right.”
- ¶ 454・455 “Botan-Dōrō” (two Chapters of a Novel)
- ¶ 456 “Why?” (a leading Article.)

これらの 10 項目のうち、¶ 446 から ¶ 447 までは単文、¶ 448 から ¶ 450 は対話形式である。¶ 451 以降はいわゆる読本と見なされる。¶ 449 のことわざ、¶ 451 の挿話からのダイアログは、本稿の調査資料のなかでは初めて確認されるものである。¶ 449 に収められている日本のことわざは海外へもっとも早く紹介されたものであろう。ただ、チェンバレンの ¶ 446、¶ 447、¶ 448 の会話文例の配列にもリギンズとブラウンと同様、前後の脈絡のない単文の羅列が目立つ。

黒野『露和通俗会話篇』の内容は次のとおり、第 1 編と第 2 編からなる。目次は漢字の部分のみをあげる。また目次には「奉公人。召使」のように「。」を使用しているが、読みやすさを考え、中点 (・) に改める。

第 1 編 (2-183 頁)

- (1) 一週の日々の名、(2) 昼夜の小分け、(3) 月・十二個月、(4) 四季、
- (5) 時間の事、(6) 元行〔土・空気・火・水〕、(7) 金属の名称、(8) 色、
- (9) 天気、(10) 数の名：奇数・勘定の数／序数・順序の数／分数、
- (11) 食物及飲物、(12) 食物・食事、(13) 食卓の事、(14) 親族、

- (15) 體の部分、(16) 衣服・着類、(17) 果実類、(18) 花類、(19) 動物類、
 (20) 学校の事、(21) 家の事、(22) 家具・室具、(23) 奉公人・召使、
 (24) 職業、(25) 善徳及過失、(26) みなか(田舎)のこと、(27) 鳥類、
 (28) 魚類・魚類・魚類、(29) 普通ニ用ユル若干ノ動詞

第2編(184-455頁) 軽易キ談話

- (1) 挨拶(敬礼)の事、(2) 遊歩の事、(3) 時間の事、(4) 天気の時、
 (5) 食事の時、(6) 恩謝の時、(7) 悦悲及怒のこと、(8) 満足と不満足のこと、
 (9) 年齢の時、(10) 縫仕事のこと、(11) 言葉の時、(12) 入來の時、
 (13) 稽古の時、(14) 夏休に学校より暇の出ること、(15) 田舎へ遊に行く事、
 (16) 遊歩の後、(17) 四季の時(又春夏秋冬)、(18) 続き、
 (19) 続き、(20) 冬の時、(21) 稽古の時、(22) 続き、(23) 手紙の時、
 (24) 読書の事、(25) 語学の事、[第26章なし]、(27) 学問及技藝の時、
 (28) 色色の技術の話、(29) 続き、(30) 手仕事(手工・手技)の時、
 (31) 続き、(32) 朝飯の時、(33) 続き、(34) 見舞(問候・伺候)の時、
 (35) 人のことに就て問合せる事、(36) 差出及面談の時、(37) 遊山(遊興)の時、
 (38) 園の時、(39) 続き、(40) 遊歩の時、(41) 続き、(42) 洗礼の時、
 (43) 葬式の事、(44) 郵便の時、(45) 水浴、(46) 書物を買う話、
 (47) 晩餐の時、(48) 時計師との話、(49) 理髪師との話、(50) 商人との話、
 (51) 仕立屋にての話、(52) 遊行の話、(53) 税関、(54) 旅券、
 (55) 蒸気船の旅、(56) 鉄道の旅行、(57) 宿屋(客館)の話

第1編は各課に提出されている語彙を使った「練習の文句」の例文群を本文とし、「聞く、話す」ための日本語の基本的な文型を習熟させることに重点が置かれている。この「練習の文句」という項目の提出は同書が初めてである。続く第2編では談話を中心に「読む、書く」能力を定着させようとしている。同書の会話文例は黒野自ら採集したもののようなものであるが、先述したゴンザ『日本語会話入門』と同じく、宗教的・制度的な場面が設けられている。第1編の(25)、第二編の(42)(43)(47)がその具体例である。

以上、黒野『露和通俗会話篇』をもって国内外の日本語会話書の内容の検証は終わる。この検証の結果を念頭に入れて、サトウの『会話篇』を眺めると、同書の価値を高める次の5点の特色がみえてきた。

1点目は、『会話篇』の内容が充実していることである。調査対象の目次を見比べると明らかのように、サトウの会話はリギンズ『英和对訳会話書』とオー

ルコック『日常日本語対話集』の内容に近いところが多い。だが、サトウの会話には生活に必要な最も基本的な使用語彙と理解語彙のみならず、使用人をめぐる話題、当時の時事問題、日本人の生活習慣に関する日本語が含まれていて、話題の領域においても質においてもリギンズとオールコックの両書をはるかに超えている。

2点目は、『会話篇』には、ゴンザ『日本語会話入門』、ブラウン『会話日本語』、チェンバレン『日本語口語入門』にみる会話文例の配置に問題はなかった。すなわち、学習者の視点から不便な取り留めのない文例の羅列は、サトウ『会話篇』には見られないのである。ゴンザとブラウンとチェンバレンの教材にみる文例の羅列は、暗記による学習法が前提にあるのではなからうか。チェンバレンが『日本語口語入門』の「序言」に暗記の必要性和有効性を強調していることも、この問題と無関係ではないように思われる。

3点目は、『会話篇』の対話は日本人同士のやりとりの設定をしていることである。調査対象のうち、『朝鮮板伊路波』、『捷解新語』、ブラウン『会話日本語』、オールコック『日常日本語対話集』、チェンバレン『日本語口語入門』、黒野『露和通俗会話篇』の6点は主人と客といった発言者を設定しているが、どちらかが日本人で、どちらかが外国人設定である。それに対して、サトウの『会話篇』では全25章中、21章が日本人同士の会話設定である。外国人と日本人の会話という設定は(3)先生と生徒、(11)路上で、(20)漢字の学習、(21)条約違反についての外国領事と日本人役人の問答の三つの章のみである。これには学習者をはじめから日本人の視点に立つようにして自然な日本語を身に付けさせようとした狙いがあったように思われる。なお、『朝鮮板伊路波』とオールコック『日常日本語対話集』では個々の例文の発言者に対する設定については言及されていないが、『朝鮮板伊路波』は往信(商人)と返信(客)という形式をとっている。オールコック『日常日本語対話集』も(15) Lacquer ware、(16) China ware はいずれも商人と客の対話である。

4点目は、『会話篇』が個人名をあげていることである。個人名はゴンザの会話書に2例(320)あるのみで、その他の調査対象には確認されない。たとえば『捷解新語』の場合は「主」(朝鮮人)と「客」(日本人)という設定、ブラウンの『会話日本語』には「Foreigner 対 Native」「Master 対 Servant」「Buyer 対 Seller」という設定があるのみである。『会話篇』に登場する個人名は、サムライのツルザワ、使用人のキチスケ・トラスケ、家来のキサブローなどがあ。個人名の使用は会話に臨場感をもたらす。

5点目は、『会話篇』には教材としての不備があまりないことである。ゴン

ザ『日本語会話入門』にみる原拠、リギンズ『英和对訳会話書』にみる会話文例の底本の問題、ゴンザ『日本語会話入門』と黒野『露和通俗会話篇』にみる宗教的な側面などの教材として相応しくない面が『会話篇』には確認されない。チェンバレン『日本語口語入門』も同様である。

以上、サトウ『会話篇』の内容にみる特色を明らかにした。それでは、次の論点である表記の検討に移ろう。

3-2. 表記

サトウ『会話篇』では日本語の文例をローマ字表記で記して、日本語の基礎知識のない人でも気軽に日本語の勉強がはじめられるように教材づくりが行われている。そこで、調査対象の会話文例の表記の実態を検討してみた。その結果が表1である。

表1 表記の実態

資料名	朝鮮板伊路波 (1492)	康遇聖捷解新語 (1676)	ゴンザ日本語会話入門 (1736)	リギンズ英和对訳会話書 (1860)	ブラウン会話日本語 (1863)	オールコック日常日本語対話集 (1863)	サトウ会話篇 (1873)	チェンバレン日本語口語入門 (1888)	黒野露和通俗会話篇 (1894)
本文の表記	平仮名表記の日本語	平仮名表記の日本語	ロシア語表記の日本語	英語文	英文と片仮名表記の日本語	ローマ字と片仮名表記の日本語	ローマ字表記の日本語	ローマ字表記の日本語	ロシア語と日本語表記の日本語

各会話書の表記の実態を具体的にみていこう。『朝鮮板伊路波』から始める。同書の文例は縦書きで、平仮名の多い書き下しである。平仮名の他に「御」「候」などの書簡文によく使われる異体字も使われている。

『捷解新語』の文例も縦書きである。各行の中央に平仮名を主とした日本語を置き、その右側に諺文による音注（発音）を加えてある。調査対象中、音注がみられるのは同書のみである。会話文例は基本的に平仮名表記であるが、時に漢字「御・申」の草体をまじえ、仮名でも「お・か・へ・り」には「於・加・遍・里」草体を用いたりもしている。表記方式は『朝鮮板伊路波』を模したようである。

ゴンザ『日本語会話入門』の文例はロシア字（キリル文字）で書かれ、アクセント符号まで付してある。日本語字体と漢字は使用していない。

リギンズ『英和对訳会話書』の文例は英語で書かれている。日本語字体と漢字は使用していない。

ブラウン『会話日本語』の文例は次に示したとおり、英語、ローマ字、片仮名からなる。平仮名と漢字は使っていない。下記の引用文はAの5番で、表記

は原文のとおりである。

5. Any body can do that.

So-re wa do-na-ta de mo de-ki-ma-s.'

ソレ ハ ドナタ デモ デキマス

Do. So-re wa da-re de mo de-ki-ru.'

ソレ ハ ダレ デモ デキル

上記のように会話文例は同一の内容の表現に二通りの言い方をあげているのが特色である。前者は目上、あるいは同等にいう場合、後者は目下にいう場合と分けて示している。ただし、同書の会話集にはBで始まる文例の45番からYで終わる文例の1270番までの英文、ローマ字日本文、カタカナ日本文において誤植が多い。

オールコック『日常日本語対話集』の文例は、フランス式ローマ字（フランス語のアルファベット）と片仮名を使っている。漢字は使用していない。形式的にはブラウンのそれを模したようである。ただ、この『日常日本語対話集』の会話文例には杉本（1999:533）の指摘のとおり、印刷上の単純なミスやローマ字表記と仮名表記の不一致がみられる。本稿の調査対象中、フランス式ローマ字で日本語の発音を記している会話書は同書のみである。その理由として「世界の教養ある階級には、おそらくもっともなじみがあり、いくつかの音は英語よりも日本語の発音に近いからである」（引用者訳）と序文に記している。

サトウ『会話篇』の文例は、第1部はローマ字表記の日本文のみ、第3部は仮名および漢字仮名交じりの日本文である。

チェンバレン『日本語口語入門』の文例はローマ表記の日本文のみである。日本語字体も漢字も使用していない。表記方式はサトウを模している。

黒野『露和通俗会話篇』の文例にはキリル文字（ロシア字）や漢字、ひらがな、カタカナに加え、ナカガナといういわゆる変体仮名が使われている。漢字には全部ふりがなが付いている。

以上、9点の会話書の表記について検討してみた。この検証の結果に基づいて、サトウの『会話篇』を眺めると、次に記す4点の特色に気が付く。

1点目は、『会話篇』にみるローマ字表記はオールコック『日常日本語対話集』を模したことである。ただ、オールコックの会話文例にみる片仮名表記は、サトウは採用していない。サトウ『会話篇』と同様、日本語字体を使わない教材には、ゴンザ『日本語会話入門』、チェンバレン『日本語口語入門』がある。

2点目は、『会話篇』にはブラウン『会話日本語』にみる誤植の問題、オールコック『日常日本語対話集』にみる印刷上の単純なミスやローマ字表記と仮名表記の不一致のような不具合は確認されない。

3点目は、サトウの『会話篇』ではリギンズ『英和対訳会話書』とブラウン『会話日本語』にみる英語による会話の作成を踏襲せず、日本語を提示していることである。これは、公使館の翻訳官であったサトウ自らが日々直面したはずであるが、細やかな日常の日本語表現に対応する対訳語がなかったりして、その表現を切り捨てることがあるために、どうしても文章が硬くなりがちで、また自然さに欠けるため、英語による会話の作成を避けたのであろう。

4点目は、サトウ『会話篇』（第1部）も漢字を使っていないことである。サトウのほか、ゴンザ『日本語会話入門』、リギンズ『英和対訳会話書』、ブラウン『会話日本語』、オールコック『日常日本語対話集』、チェンバレン『日本語口語入門』の5点にも漢字は使われていない。

最後に、1点目と4点目の理由について考えてみよう。まず、1点目の日本語字体を使わなかったことは、日本語の読み書きが不十分な学習者、あるいは必ずしも書きことば習得が必要でない外国人に日本語字体の学習と会話の勉強を両立させるよりも、はじめのうちは馴染みやすいローマ字、または母語をもって日本語の発音を写し、話し言葉の習得に専念させた方がよいと考えたからであろう。続いて、4点目の漢字を使用しないことは、ロシアも含めて非漢字圏の著者の会話書にみられる現象で、漢字が書けない、漢字が読めないというハンデからである。オールコックの『大君の都一幕末日本滞在記〔上〕一』（265-266）には、漢字を含む書きことば学習の難しさが述べられている。

ひとたび書きことばに目を転じると、山ほどの困難がある。書き方には、三つの様式がある。第一の方法は、中国文字を使用し、第二と第三は、それぞれ片仮名と平仮名として知られている二つのアルファベットを用いる。だが、これだけでは、この問題にちょっと足をふみいれただけにすぎぬ。ヨーロッパ人の学者にとって不幸なことに、日本人は中国文字を書くのたくさんの異なった方法をもっており、さらにいっそう困ったことには、そういう異なった方法のすべてを同一のページにまぜる習慣がある。このように、まず中国文字、あるいはむしろそれにもっとも近いものからはじめるとすると、四角な文字を書くのさえ、三通りの方法があるのである。第一が楷書（「楷」とは「注意」という意味）といわれるもので、普通には詩や印刷本にだけ用いられる。第二は行書（「行」とは「行動」な

いし「外に出ること」という意味)で、公けの書簡や公文書用の型である。第三は草書(「草」は「草」ないし「草木」という意味)で、同格の人同士の打ちとけた通信に用いられる。

このように漢字が外国人の日本語の研究や学習の障害物になっていたため、著者たちは会話文例に漢字を導入するのを避けようとしたのである。

さて、現代日本語標準表記の立場からするならば、『朝鮮板伊路波』と『捷解新語』にみる平仮名表記、ゴンザ『日本語会話入門』と黒野『露和通俗会話篇』にみるロシア語表記、リギンズ『英和对訳会話書』とブラウン『会話日本語』にみる英語表記、オールコック『日常日本語対話集』とサトウ『会話篇』とチェンバレン『日本語口語入門』にみるローマ字表記は、学習者に話し言葉を習得させるために著者たちが特別に採った例外的な表記法であったことが判明する。しかも、この例外的な表記法は著者自らの日本語学習の経験とノウハウから編み出されたものとする。一方、サトウ『会話篇』第3部の和装本と黒野『露和通俗会話篇』における日本文は日本語標準表記であったという点で評価に値する。また平仮名であっても日本字体による文章であるがゆえに音注がみられる『捷解新語』の表記法も注目すべき事項である。

それでは、この辺で調査対象の表記についての検討は終わりにし、次の検討事項である対訳について論を進めたいと思う。

3-3. 対訳

『会話篇』には逐語訳と直訳も用意されている。そこで、調査対象にみる対訳の実態を調査してみた。その結果が表2である。

表2 対訳の実態

資料名	朝鮮板伊路波 (1492)	康遇聖捷解新語 (1676)	ゴンザ日本語会話入門 (1736)	リギンズ英和对訳会話書 (1860)	ブラウン会話日本語 (1863)	オールコック日常日本語対話集 (1863)	サトウ会話篇 (1873)	チェンバレン日本語口語入門 (1888)	黒野露和通俗会話篇 (1894)
対訳	×	日(和)韓	露和	英和	英和	和英・和仏	和英	和英	露和

上記の表2のとおり、『朝鮮板伊路波』には対訳が見当たらなかった。その他の8点には全部付いている。『捷解新語』には和韓、ゴンザ『日本語会話入門』と黒野『露和通俗会話篇』は露和、リギンズ『英和对訳会話書』とブラウン『会話日本語』は英和、オールコック『日常日本語対話集』とサトウ『会話篇』とチェンバレン『日本語口語入門』は和英である。その実態を『捷解新語』から詳しくみていこう。

『捷解新語』は漢字ハングルまじりの韓国語訳であるが、巻十は漢字だけで書かれている。この日本語と韓国語との対訳は日韓両国の国語学の方面では極めて重要視されている。

ゴンザ『日本語会話入門』は露和訳で、各ページの右半分にはロシア語で記してある。村山の翻字によると、全体に直訳的傾向が強く、また文章も硬い。さらに本文の語順も違っていて日本語の文章になっていない場合もある。具体例をあげると「書いた物から / 出来る / 合わせて」(15章 352)といった具合にロシア語の語順に従った文章である。日本語の語順にすると「文字から音節が出来上がる」となる。

リギンズ『英和対訳会話書』は英和訳である。下記の(5) Coming And Goingの1番目の文例のように一つのセンテンスに対して、常態と敬体の2種の対訳を例示している。引用文の表記は原文のとおりである。

Where are you going? Do-Ko ni yu-ku ka.
Do-Ko ye o-i-de ka.

このように一つのセンテンスに敬体と常態の対訳を例示しているのはリギンズが初めてである。

ブラウン『会話日本語』も英和訳である。ブラウンはリギンズと違って前述の3-1に示したとおり、同一の内容の表現に敬体と常態の文例をあげ、それに対応する2種の対訳を提出している。中には目上・同輩・目下という注記のついた訳文もある。

オールコック『日常日本語対話集』には英語訳とフランス語訳を載せてある。ただ、第2部の(4) Of Health・Of coldと(5) Of the Healthには対訳がない。和英と和仏の対訳を載せているのは同書のみである。だが、第2部(1)の1「Connitchiwa [コンニチワ]」と対訳の「Good morning, sir! ; Bonjour!」にみるような英語・仏語と日本語との乖離が確認される。

サトウ『会話篇』は英訳である。見開きのもう一方のページに載っている。日本語が十分にこなれた英語に翻訳されているため、とても理解しやすいという評価をうけている²⁷⁾。そして、第2部には逐語訳(EX1-5)や直訳(EX1-17)も提示している。「EX1-5」の文例「*Mō sukoshi nochi ni o idé nasai*」の逐語訳は約3頁にわたっておこなわれている。会話書に対訳(意訳)のほかに逐語訳と直訳が提出されているのは『会話篇』のみである。これは一語一句が国益に関わる外交文章の翻訳に関わっていた著者ならではの編集方針であったよう

に思われる。逐語訳の提示はチェンバレンに影響を与えている。

チェンバレン『日本語口語入門』もサトウと同様に英語訳が基調であるが、応用編のうちの ¶ 446、¶ 449、¶ 451-459 の日本文には逐語訳も付けている。

黒野『露和通俗会話篇』の対訳はロシア語で書かれている。

以上、9点の会話書にみる対訳について検討してみた。オールコック『日常日本語対話集』にみるフランス語訳や、リギンズ『英和対訳会話書』にみる一つのセンテンスに対して敬体と常態の対訳を用意している点は注目に値する。そして、サトウの『会話篇』にみる意識のほかに逐語訳と直訳の提示は特筆すべき事項である。なお、『朝鮮板伊路波』に対訳がないことであるが、同書は写字と暗唱をとおして日本語字体を習熟することと書簡文の様式を覚えさせることに重点を置いていたためではなかろうか。

さて、ここで調査対象の表記の検討を終え、最後の検討事項である注解について論を進めたいと思う。

3-4. 注解

『会話篇』には、第1部の対話文の日本語に用いられている語彙・語句についての注解を内容とする第2部 (Part II) があって、独習や復習のよりどころとなっている。そこで、他の会話書にも注解がみられるかを調査してみた。その結果が表3である。

表3 注解の有無

資料名	朝鮮板 伊路波 (1492)	康遇聖 捷解新語 (1676)	ゴンザ 日本語会 話入門 (1736)	リギンズ 英和対訳 会話書 (1860)	ブラウン 会話日本 語 (1863)	オールコック 日常日本 語対話集 (1863)	サトウ 会話篇 (1873)	チェンバレン 日本語口 語入門 (1888)	黒野 露和通俗 会話篇 (1894)
注解	×	○	×	○	○	○	○	○	○

上記の表のとおり、『朝鮮板伊路波』とゴンザ『日本語会話入門』には注解がない一方、他の7点には注解が確認された。以下、その実態を紹介しよう。

まず『捷解新語』には原刊本の巻1と巻10の巻末に注解が収まっている。注解は全体で57の語彙・語句に付いている。具体的には、巻1では「無斗方・日吉利」のような宛字、また「氣遣」「迷惑」のような朝鮮では使われていない漢語などの計14語を抜き出して漢字まじりハングルで訳を添えてあった。一方、巻10では「御心得被成候而可被下候」のような語句や「手前」「見舞」「肝入」「中中」「殿様」といった漢語、計43語をリストアップして漢字まじりハングルで注を付けている。本稿の調査対象のうち、注解が確認されるのは『捷解新語』がもっとも早い。

リギンズ『英和対訳会話書』の注解は(1) Times And Seasons に現れている「暮れ」と「明け」の2語であった。

ブラウン『会話日本語』の注解は全体で24カ所にみられ、本文の余白や行間に括弧で括って入れてある。いわゆるト書きである。具体的には to a superior (12)、to an equal (12)、to an inferior (12)、said to children (592)、said of the weather (624) といった敬体・常体の使い分けやことばの使い方について記している。具体例の右の括弧内の数字は文例の所在を示す(以下同様)。

オールコック『日常日本語対話集』の注解は全体で30語に付いている。大部分が脚註であるが、時に本文中にもコメントがある。たとえば、サカナ(p.27)、デキ(p.33)などがある。サカナには Next to rise, fish is the great staple of a Japanese meal. their diet consists chiefly of fish and vegetables ということばの文化事情を、デキ(ヨウカ)には deki, dekirou, the verb・to be able・conjugated like narou というこの動詞の活用法を記している。

サトウ『会話篇』の注解は第2部に収まっていて、第1部の25章までの日本文中に出てくる学習上考慮すべき語彙や語句を取り上げ、その意味・用法について説明を英語で行っている。対象とする語彙や語句の領域も広く、注解も詳細を極める。具体例として「途方もない」(EX2-31)をあげる。引用する注解は櫻井(2009)による日本語の訳文である。

途方もない、bewildering (当惑させる)、unconscionable (法外な)、out of all reason (論外な)の意。「途方」the direction of the road (前途の方向)、「も」even、「ない」the adjective non-existent, not (存在しないことを表わす形容詞で not の意)の複合語。「途方」は例えば「途方に暮れる」to be in the dark about the road or course to be pursued (途中で暗闇に見舞われる)、to be perplexed what to do (どうすべきか分からず当惑する)、bewildered (当惑する)などと使われる。従って「途方もない」は、そのことによって bewildered、bewildering (あっけにとられる)、outrageous (あまりにひどくて我慢できない)といった状態になることを言う。(後略)

上記の「途方もない」の注解には初級から上級までの学習者が求めている説明が網羅されていると考える。じつは、「途方」という漢語は筆者の母国語の韓国語に使われていないので、多義語としての使い方に対する注解は興味深い。

チェンバレン『日本語口語入門』の注解は基本的に脚注であるが、本文中に添えている場合もある。

黒野『露和通俗会話篇』の注解は脚注であるが、3編の日本諺語俚語及文句小集に集中的に行われている。

本項では、7点の会話書にみられる語彙や語句に関する注解の実態を調べてみた。『捷解新語』（原刊本）にみる注解が最も早く、それにリギンズ、ブラウン、オールコック、サトウ、チェンバレン、黒野の会話書が続く。だが、サトウ以前の『捷解新語』、リギンズ『英和对訳会話書』、ブラウン『会話日本語』、オールコック『日常日本語対話集』は取り上げた分量が極めて少ない。注解はサトウにいたって広く、深く、詳しくなっている。

いよいよ本稿の終わりが近づいてきたので、その締めくくりをしたいと思う。

4. おわりに

本稿は、視点を明治初期までの朝鮮、ロシア、英国、日本で出版された日本語会話書において、対照という方法で、そこから映し出されるアーネスト・サトウ『会話篇』のディテールを評価の対象に加えるべく、論を進めてきた。以下に要点をまとめておきたい。

1点目は、調査対象8点が海外で出版されているなか、『会話篇』は日本で出版され、日々の生活において必要不可欠な外国人の日本語習得を支えたということである。

2点目は、『会話篇』はほどよい学習量をもっていることである。調査対象が小冊子か大冊の中、『会話篇』の全25章(153頁)は学習に要する時間や終了の見通しが付きやすく、次の段階に進みやすい内容と学習量である。

3点目は、『会話篇』の内容が充実していることである。サトウの会話はリギンズ『英和对訳会話書』とオールコック『日常日本語対話集』の内容に近いところが多い。だが、サトウの会話には使用人をめぐる話題、当時の時事問題、日本人の生活習慣に関する日本語が含まれていて、話題の領域においても質においてもリギンズとオールコックの両書をはるかに超えている。

4点目は、『会話篇』には、ゴンザ『日本語会話入門』、ブラウン『会話日本語』、チェンバレン『日本語口語入門』にみる会話例文の配置の不具合はなかった。つまり、学習者の視点から不便な取り留めのない文例の羅列は『会話篇』にはあまり見られない。

5点目は、『会話篇』対話は日本人同士のやりとりの設定をしていることで

ある。調査対象のうち、『朝鮮板伊路波』、『捷解新語』、ブラウン『会話日本語』、オールコック『日常日本語対話集』、チェンバレン『日本語口語入門』、黒野『露和通俗会話篇』の6点は主人と客といった発言者を設定しているが、どちらかが日本人で、どちらかが外国人設定である。それに対して、サトウの『会話篇』では全25章中、21章が日本人同士の会話設定である。

6点目は、『会話篇』が個人名をあげていることである。『捷解新語』の場合は「主」（朝鮮人）と「客」（日本人）という設定、ブラウンの『会話日本語』には「Foreigner 対 Native」「Master 対 Servant」「Buyer 対 Seller」という設定があるのみである。『会話篇』に登場する個人名は、サムライのツルザワ、使用人のキチスケ・トラスケ、家来のキサブローなどがある。

7点目は、『会話篇』には教材としての不備があまりないことである。ゴンザ『日本語会話入門』にみる原拠、リギンズ『英和対訳会話書』にみる会話文例の底本の問題、ブラウン『会話日本語』にみる誤植の問題、オールコック『日常日本語対話集』にみる印刷上の単純なミス、ローマ字表記と仮名表記の不一致、英語・仏語と日本語との乖離などの問題、ゴンザ『日本語会話入門』と黒野『露和通俗会話篇』にみる宗教的な側面など、教材として相応しくない面が『会話篇』には発生していない。

8点目は、『会話篇』ではリギンズ『英和対訳会話書』とブラウン『会話日本語』にみる英語を日本語に訳すという方法を踏襲せず、日本語を提示していることである。

9点目は、『会話篇』の対訳には意識のほかに第2部に逐語訳や直訳もあることが特色である。

10点目は、『会話篇』の注解には初級から上級までの学習者が求めている説明が網羅されていることである。調査対象にみる注解は『捷解新語』（原刊本）がもっとも早く、それにリギンズ、ブラウン、オールコック、サトウ、チェンバレン、黒野の会話書が続く。だが、サトウ以前の調査対象にみる注解は初歩的で分量も極めて少ない。サトウにいたって、対象とする語彙や語句の領域も広く、注解も詳細を極める。

総じて、調査対象との対照でなければ、『会話篇』の特色として認識されずにいたかもしれない上記の10点は日本語教材としての『会話篇』の価値をさらに高めるに違いない。なお、本研究は調査対象の目次に含まれる文の分析まで踏み込むことができなかつた。それは今後の検討課題としたい。

注

- 1) 坂田精一訳 (1960)『一外交官の見た明治維新〔上・下〕』(アーネスト・サトウ著、岩波書店)を指す。本稿では『回想録』と記す。
- 2) 古典刊行会叢書 (1972)『弘治五年板伊路波本文と索引』(洛文社)を用いる。
- 3) 京都大学国文学会 (1957)『捷解新語』を用いる。
- 4) 村山七郎 (1965)『漂流民の言語—ロシアへの漂流民の方言学的貢献—』(吉川弘文館)の所収を用いる。
- 5) Kessinger Legacy Reprintsを用いる。邦題は昭和女子大学近代文学研究室 (1959)「J. リギンズ」『近代文学研究叢書』(12)に従う。原題は『One Thousand Familiar Phrases in English and Romanized Japanese』である。
- 6) 加藤智己・倉島節尚編 (1998)『幕末の日本語研究 S. R. ブラウン会話日本語—複製と翻訳・研究—』(三省堂)を用いる。
- 7) BIBLIOLIFE版を用いる。邦題は杉本 (1999:529)に従う。原題は『Familiar Japanese Dialogues in Katagana and Roman Characters, with French and English Translation』である。
- 8) 『会話篇』東洋文庫 (1967)と松村明 (1998)『増補江戸語東京語の研究：春秋雑誌会話篇』(東京堂)を使用する。
- 9) 大久保恵子編訳 (1999)『チェンバレン『日本語口語入門』第2版翻訳付索引』(笠間書院)を用いる。
- 10) 金沢大学図書館蔵を用いる。金沢大学図書館蔵より同書を館外に貸し出していた。記して感謝申し上げる。
- 11) ロシアとヨーロッパについては柴田俊造 (1991)「東欧諸国の日本語教育」と大島真木 (1991)「西欧諸国の日本語教育」を参考にしてまとめた。両研究は『講座日本語と日本語教育 15—日本語教育の歴史—』(明治書院)に所収されている。
- 12) ここに記した内容は、辻星児 (1997)『朝鮮語史における『捷解新語』』岡山大学文学部研究叢書 (16)と『韓民族文化大百科事典』(韓國學中央研究院:1991)の「司訳院」を参考にした。
- 13) ロシアの情勢については、中村喜和 (1968)「註記ロシアの東方進出と日本の漂流民」『日本庶民生活史料集成 [5]』(三一書房)を参考にした。
- 14) 安政五カ国条約やイギリス公使館およびオールコックについては、『日本史大事典』(平凡社:1992)と『日本歴史大辞典』(河出書房新社:1964)を参考にした。
- 15) この記事は、森田武 (1957)「捷解新語解題」『捷解新語』(京都大学国文学会)を参考にした。
- 16) 著者については、村山七郎 (1965)『漂流民の言語—ロシアへの漂流民の方言学的貢献—』(吉川弘文館)を参考にした。
- 17) 村山は5点の著作のなかで『露日語彙集』をアルファベット順に編集して翻訳・翻刻し、『日本語会話入門』の翻訳とあわせて『漂流民の言語』に収めている。『簡

略日本語文法』『新スラヴ日本語辞典』『友好会話手本集』『Orbis Pictus』は未見である。なお、当初、『友好会話手本集』も調査対象とする予定であったが、鹿児島県立図書館所蔵本である同書は館外貸し出しやコピー対応ができないため、またコロナ禍によって調査に出かけられなかったため調査対象に加えることができなかった。

- 18) 著者については、昭和女子大学近代文学研究室（1959）「J. リギンズ」『近代文学研究叢書』（12）を参考にした。
- 19) 著者については、昭和女子大学近代文学研究室（1956）「S. R. ブラウン」『近代文学研究叢書』（1）を参考にした。
- 20) 著者については、山口光朔訳（1962）『大君の都—幕末日本滞在記〔下〕—』（オールコック著、岩波書店：411-412）を参考にした。
- 21) 著者については、昭和女子大学近代文学研究室（1969）「アーネスト・サトウ」『近代文学研究叢書』（31）を参考にした。
- 22) 著者については、昭和女子大学近代文学研究室（1973）「バジル・ホール・チェンバレ」『近代文学研究叢書』（38）を参考にした。
- 23) 著者については、小林潔（2012）「黒野義文『露和通俗会話篇』について」『神奈川大学：人文研究』（176）を参考にした。
- 24) この文例数は原刊本の1章の文例が約6行、改修本の1章の文例が約4行なので、対話が収録されている巻一から巻九までの章数（原刊本244章、改修本361章）に行数をかけて算出したものである。
- 25) 『捷解新語』の調査には必要に応じて原刊本のほかに改修本と重刊改修本も用いる。
- 26) 引用の際は EXERCISE（EX と略す）のナンバー、頁数、番号によって引用箇所を所在を示す。
- 27) 「THE JAPAN WEEKLY MAIL: Reprint Part1」（1873年10月18日号）『THE JAPAN WEEKLY MAIL』（復刻版、第一期第一回配本（1870-1874）：2005）に掲載されている。

参考文献

- 飯田晴巳（2002）『明治を生きる群像近代日本語の成立』おうふう。
- 井ノ口淳三（1998）「漂流民ゴンザによるコメニウスの翻訳」『追手門学院大学人間学部紀要』7：71-85。
- 石井光治（1957）「薩道著『會話篇』『神戸外大論叢』8（1）：83-87。
- 江口泰生（2006）『ロシア資料による日本語研究』和泉書院。
- 大久保恵子（1988）「明治初年における Adjective 考—E. サトウ「會話篇」を中心として—」『お茶の水女子大学日本文化研究年報』12：119-132。
- 大久保恵子編・訳（1999）『チェンバレ『日本語口語入門』第2版翻訳付索引』笠

間書院.

- 大島真木 (1991) 「西欧諸国の日本語教育」『講座日本語と日本語教育 15—日本語教育の歴史—』明治書院：1991.
- 金沢朱美 (2008) 「アーネスト・サトウと日本語研究—『会話篇』を中心に—」『目白大学人文学研究』4:171-181.
- 金田弘・宮腰賢編著 (1994) 『新訂国語史要説』秀英出版.
- 加藤智己・倉島節尚編 (1998) 『幕末の日本語研 S. R. ブラウン会話日本語—複製と翻訳・研究—』三省堂.
- 黒崎佐仁子 (2011) 「役割語から考える自称詞『わし』の方言性と出現時期」『聖学院大学論叢』23 (2) : 1-14.
- 小島俊夫 (1972) 「会話編 (E.Satow) にあられた江戸ことば」『国語国文』41 (5) : 41-53.
- 小林潔 (2012) 「黒野義文『露和通俗会話篇』について」『神奈川大学：人文研究』176 : 59-93.
- 柴田俊造 (1991) 「東欧諸国の日本語教育」『講座日本語と日本語教育 15—日本語教育の歴史—』明治書院：1991.
- 昭和女子大学近代文学研究室 (1956) 「S. R. ブラウン」『近代文学研究叢書』1 : 89-134.
- 昭和女子大学近代文学研究室 (1959) 「J. リギンズ」『近代文学研究叢書』12 : 295-338.
- 昭和女子大学近代文学研究室 (1969) 「アーネスト・サトウ」『近代文学研究叢書』31 : 127-163.
- 昭和女子大学近代文学研究室 (1973) 「バジル・ホール・チェンバレ」『近代文学研究叢書』38 : 153-214.
- 坂田精一訳 (1960) 『一外交官の見た明治維新〔上・下〕』アーネスト・サトウ著、岩波書店.
- 櫻井豪人 (2009) 「アーネスト・サトウ『会話篇』Part2 訳注稿」『茨城大学人文学部紀要：人文コミュニケーション学科論集』1:2-31.
- 杉本つとむ (1999) 『西洋人の日本語研究〔10〕』八坂書房.
- 辻星児 (1997) 『朝鮮語史における『捷解新語』』岡山大学文学部研究叢書 16.
- 常盤智子 (2003) 「ケンブリッジ大学図書館蔵 アーネスト・サトウ直筆資料について—『日本語会話練習帖』と『会話篇』との比較および翻字—」『千葉大学日本文化論叢』4 : 49-59.
- 常盤智子 (2004) 「J. リギンズ『英和日用句集』の成立過程—『南山俗語考』との関連を中心に—」『国語と国文学』10 : 55-69.
- 中村喜和 (1968) 「註記ロシアの東方進出と日本の漂流民」『日本庶民生活史料集成〔5〕』三一書房 (: 859-863).

- 飛田良文 (2007) 「洋学資料」『日本語学研究事典』明治書院：1076-1086.
- 福島邦道 (1949) 「朝鮮板伊路波合用言語格の研究」『実践女子大学文学部紀要』16：1-18.
- 松村明 (1998) 『増補江戸語東京語の研究』東京堂.
- 村山七郎 (1965) 『漂流民の言語—ロシアへの漂流民の方言学的貢献—』吉川弘文館.
- 森田武 (1957) 「捷解新語解題」『捷解新語』京都大学国文学会.
- 山口光朔訳 (1962) 『大君の都—幕末日本滞在記—』オールコック著、岩波書店.
- 兪三善 (2015) 「アーネスト・サトウ『会話篇』における言いさし表現について」『実践国文学』88：左 1-24 (224-201).
- 兪三善 (2017) 「アーネスト・サトウ『会話篇』にみえる感動詞の諸相」『学習院大学：人文』16：163-181.
- 兪三善 (2019) 「日本語の教材としてのアーネスト・サトウ『会話篇』」『実践国文学』96：左 24-46 (143-121).
- 吉田澄夫 (1952) 「東京語の特色」『近世語と近世文学』東洋館.
- 『THE JAPAN WEEKLY MAIL』(復刻版)、第一期第一回配本 (1870-1874)：2005.
- 『日本史大事典』平凡社：1992.
- 『日本歴史大辞典』河出書房新社：1964.
- 『会話篇』東洋文庫：1967.

(ゆ さむそん・実践女子大学非常勤講師・桐蔭横浜大学非常勤講師)